法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

# 『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」におけるフリージアンとジュートの居住地域について : Fr.Klaeberの見解を中心に

岩谷, 道夫 / IWAYA, Michio

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
11
(開始ページ / Start Page)
21
(終了ページ / End Page)
39
(発行年 / Year)
2014-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009661

Hosei University Repository



# 『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」におけるフリージアンとジュートの居住地域について
## ― Fr. Klaeber の見解を中心に

法政大学キャリアデザイン学部　教授　岩谷　道夫

### 1.

古期英語の長編詩『ベーオウルフ』には、いくつかの重要な挿話が含まれている。例えば、「シウェムンドの挿話」、「ヘレモードの挿話」、「オッファ王の挿話」、「フィン王の挿話」等である。一方、古期英語に『フィンズブルフの戦』という詩があり、それは、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」と関係を持つ次の出来事を題材にしている。

西暦５世紀の中ごろ、北ヨーロッパで、ゲルマン人部族国家のフレーザンとデネの間に壮絶な戦が生じた。フレーザン（フリージアン）とは、今日のオランダのフリースラントを中心に居住していた中世初期のゲルマン人部族国家で、タキトゥス、プトレマイオス等に言及されている古くからの北海沿岸のゲルマン人であった。一方、デネとはデーン人のことで、今日のデンマーク人の祖先である。フレーザンとデネとの間の戦とは次のようなものであった。

デネの王族に、フネフとヒルデブルフという兄妹がいて、ヒルデブルフは、フレーザンの国王フィンに嫁いでいた。古くから、フレーザンとデネの関係は良好ではなく、そのような不和の関係を打開するためであろうか、ヒルデブルフは、フレーザンの国王フィンに嫁ぎ、フィンとヒルデブルフの間には長男も生まれ、良好な関係が築かれつつあった。ある時、ヒルデブルフの兄のフネフが、部下を引き連れて、フレーザンの国王フィンの城館、フィンズブルフを訪れる。嫁ぎ先にいる妹とその息子の様子を見て、またフィン王との親交を深めるためでもであっただろう。ところがフネフがフィンズブルフに滞在している

Hosei University Repository



時に、フネフは、思いがけなくも、フレーザンと、フレーザンとともにいるエーオタン（ジュート）の兵士の急襲を受ける。フネフとその部下は、勇敢に戦ったが、フネフは斃れ、多くのデネの兵士が死傷した。フレーザンの側も、多くの損害を蒙り、ヒルデブルフの息子が戦死する。その戦が、『フィンズブルフの戦』で描かれた内容である。そして、その戦の後、デネがフレーザンに復讐し、フィン王を斃すまでが、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」で述べられている内容である。

筆者は、以前、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」のいずれにも登場するデネの側の Hengest ヘンジェストという人物について、そのエーオタンすなわちジュートとの関係を中心に、フレーザンとデネの双方の側にいるジュートの遺恨がフィンズブルフにおける戦の遠因であるとするトールキンの見解を通して、フィンズブルフの戦の実体を追求したことがある(1)。フィンズブルフの戦の当時、すでにユトランドのジュートの国家は存在していなかった。デネの侵入によって、ユトランドではジュートの国家は滅亡していたからである。ジュートは、フレーザンのもとに移動する一派と、デネに属する一派に分かれたのであったが、双方のジュートの居住地域について、研究者の見解は分かれている。デネに属するジュートがユトランドに居住していたことは想像に難くないが、フレーザンのもとに移住したジュートの居住地域はどこであったか、あるいはフレーザンの居住地域がどこであったかについて、様々な見解が存在しているのである。

本稿では『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」に見出されるフレーザンとジュートの居住地域について、20世紀に『ベーオウルフ』の最も優れた編纂書を著わした Fr. Klaeber クレーバーの見解を中心に追求することにしたい。『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の、いずれの文献も、クレーバーの編纂による *Beowulf and the Fight at Finnsburg* の第３版に依拠して考えることにする(2)。

Hosei University Repository



## 2.

まず古い時代のフレーザンとジュートの居住地域について、ローマの歴史家の記述を通して確認してみたい。ローマ帝国の歴史家タキトゥスの『ゲルマーニア』には、次のような記述がある(3)。

その他に、レウディーグニー、さらにアウィオネース、そしてアングリイー、ウァリーニー、エウドセース、スアリーネース、ヌイトーネースの各部族が、それぞれ川あるいは森に守られて居住している。

上の記述は、北海沿岸の、おそらくユトランド半島に居住していたゲルマン人諸部族についてであり、その中に言及されているエウドセースが、ジュートと考えられるゲルマン人である。タキトゥスは、また、フリージアンについて、次のように記述している(4)。

フリースィイーは、その居住地域が、アングリワリイー、カマーウィーの近隣で、大・小の二つのフリースィイーに分かれ、いずれもレーヌス川を境界として大海まで続き、またその居住地域は、いくつかの広大な湖の周囲まで広がっていた。

フリースィイーと呼ばれていた部族がフリージアンであり、レーヌス川（ライン川）の流域から大海（北海）沿岸、そして広大な湖（今日のオランダのゾイデル海）周辺に居住する部族として述べられている。タキトゥスにおいて記述されたジュートとフリージアンは、それぞれ、ユトランド半島そしてライン川流域から北海沿岸に居住するゲルマン人部族であった。

タキトゥスより少し後のプトレマイオスには、ジュートについて、タキトゥスのエウドセースに部分的に似た部族名のフウンドゥスィイーというゲルマン人が記されている。確証は困難であるが、その部族が、ユトランド半島中部西側に居住しているという記述から、それがジュートである可能性は存在す

Hosei University Repository



る[5]。一方、プトレマイオスは、フリージアンについては、次のように述べている[6]。

> 海に面した居住地域のゲルマン人として、西から、アミシオス川までの地域がフリースィイー、ウィスルギス川までの地域が小カウキー、アルビス川までの地域が大カウキーである。

アミシオス川、ウィスルギス川、アルビス川は、それぞれ今日のドイツのエムス川、ヴェーザー川、エルベ川である。プトレマイオスは、フリージアンが、北海沿岸の西に居住するゲルマン人と記述している。続けて、プトレマイオスは、北海沿岸の西から東にかけてユトランド半島南端までの地域に、フリージアン、カウキー、サクソンが居住していると述べている。カウキーというのは、タキトゥスとプトレマイオスのいずれにも詳しく記述されている、北ドイツの有力なゲルマン人部族であるが、その後、歴史からその名前が見出されなくなる。フリージアンについてのプトレマイオスの言及は、サクソンについての言及を除けば、ほぼタキトゥスの記述と重なるものであろう。ちなみにタキトゥスには、サクソンの言及はない。おそらく、プトレマイオスの頃に、タキトゥスに言及されていたレウディーグニーが、サクソンと名前を変え、そのサクソンが、やがてその西方のカウキーと連合し、その連合部族全体の名称もサクソンとなったのであろう[7]。

タキトゥスとプトレマイオスのジュートとフリージアンについての記述は、２世紀のものであった。その後、ヨーロッパで、ジュートとフリージアンについての記述はいくつか見出されるが、居住地域と直接つながる内容の記述はない。

古期英語の文献では、ジュートおよびフリージアンは、まず、古期英語の最古の詩とされる『ウィードシース』に見出される。『ウィードシース』において、ジュートは、ユィータンとして登場し、ユィータンは、フランクとフレーザン（フリージアン）とともに連記されている[8]。その記述は、その前後の、アングルおよびサクソンについての言及と併せて考えれば、おそらく西暦５世紀半ばの、アングル、サクソン、ジュート、そしてフリージアンのブリテン島への移住の直前の状況であったと推定し得る。『ウィードシース』は、頭韻詩であ

Hosei University Repository



り、各行において、それぞれの語は、概ね頭韻によって規定されている。その一方で、『ウィードシース』では、記述される国家、民族が地理的に互いに隣接している場合が多い。ユィータンが、フランク、フレーザンとともに連記されているのは、地理的関係の近さを意味している可能性がある。つまり、ジュートが、ユトランド半島ではなく、フランクとフリージアンの近隣地域に居住し、さらにライン川の下流の地域に居住していると考えられるのである。

以上、ローマ帝国のタキトゥスとプトレマイオスの記述、そして古期英語の『ウィードシース』の記述から、ジュートとフリージアンの居住地域を確認した。タキトゥスとプトレマイオスの記述は、西暦２世紀ごろ、そして、『ウィードシース』の記述は、西暦５世紀の中ごろの、ジュートとフリージアンについてであると考えられる。２世紀と５世紀で、フリージアンの居住地域は、あまり変化していないが、ジュートは、ユトランドからフリージアンもしくはフランクの近くへと、居住地域を変化させているのがわかる。

次は、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の言及を通して、ジュートとフリージアンの居住地域について考えてみたい。

## ３.

『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」のいずれにおいても、ジュートが登場するのは、フリージアンの国王であったフィン王の居城であるフィンズブルフにおいてである。フィンズブルフは、フィン王の居城の一つであったことは確かであるが、正規の城であったとは書かれていない。本稿のはじめに触れたフィンズブルフにおける戦の時に、城主のフィン王は不在であり、その間に生じた戦が、『フィンズブルフの戦』だった。おそらくは、フィン王は、『フィンズブルフの戦』の時に、フィンズブルフに向う途中だったのであり、それは、正規の城からそこに向っていたのであろう。つまり、フィンズブルフは、フリージアンにとって城塞であるとともに、迎賓館のようなものであり、フィン王の日常の城ではなく、それゆえフィン王は、不在にしていたのであろう。それでは、フィンズブルフとはどこにあり、またフィン王の正規の城はどこにあったかという問題が生ずる。その問題について詳し

Hosei University Repository



く追求された研究は存在しない。文献的資料も存在しないし、またフィンズブルフに関する考古学的資料もほとんど存在しないからである[9]。ただ、ジュートの存在、そして、デネとフリージアンの関係により、ある程度、フィンズブルフとフィン王の正規の居城の位置を推測できる。そのジュートは、明らかにユトランドにいたジュートではない。『ウィードシース』に記述された頃のジュートである。つまり、ジュートの一部は、移住してきたデネによって、ユトランドを追われて、フリージアンのもとに身を寄せていたのである[10]。

今日まで、『ベーオウルフ』についての最も優れた編纂書を表したFr. Klaeber クレーバーは、『フィンズブルフの戦』の Introduction で、フリージアンとフィン王について、次のように記している[11]。

> The scene is in Friesland, at the residence of Finn. It thus appears that the war is waged between a minor branch of the great Danish nation, the one which is referred to in *Widsið* by the term *Hocingas,* and which seemed to have been associated with the tribe of *Secgan,* and the Frisians, i. e., according to the current view, the 'East' Frisians between the Zuider Zee and the river Ems (and on the neighboring islands).
> The interchangeable use of the names 'Frisians' and 'Jutes' shows that the Jutes, that is the West Germanic tribe which settled in Kent and adjacent parts (*Baeda,* H. E. i. c. 15), were conceived of as quite closely related to the Frisians.

また、上の文章の関連で、クレーバーは、次のように述べている[12]。

> This seems to be due to the fact that the Jutes, for some time previous to their migration to Britain, had lived in the vicinity of the Frisians.

上でクレーバーは、ジュートがフリージアンの近隣地域に居住していたと述べ、また、そうであれば、それは、ジュートがそこからブリテン島に渡ったという事実に符合しているように思われると述べている。ただ、クレーバーは、

Hosei University Repository



なぜジュートがフリージアンの近隣に居住していたのかは疑問として提示はせず、また、後で触れるように、『フィンズブルフの戦』や『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」に登場するヘンジェストが、ブリテン島に渡ったジュートのヘンジェストとは考えていない。つまり、フリージアンの近隣地域にいたもう一人のジュートのヘンジェストが、ブリテン島に渡ったと考えるのである。

クレーバーは、上の文章で、東フリージアンは、ゾイデル海とエムス川の間の地域を領土としていたと述べているが、また、クレーバーは、東フリージアンの国王であったと述べている(13)。確かに、タキトゥスとプトレマイオスの時代から、フリージアンは、ゾイデル海をはさんで二つに分かれていたが、フィン王が東フリージアンの国王であるという点については、古期英語の文献では明らかにするのは困難で、むしろフィン王は、東西フリージアン全体の国王であったものと思われる。

いずれにせよ、デネはユトランドを支配し、またフリージアンは、クレーバーの述べるように、タキトゥスやプトレマイオスの頃と変わらずに、北海沿岸地域に居住していた。そしてデネとフリージアンは、基本的に不和の関係にあった。そうであれば、フリージアンの国王フィンの正規の城は、ゾイデル海の南西のライン川の沿岸地域にあり、また、フィンズブルフは、東のエムス川の流域近くにあったのであろうと思われる。

ところで、『ベーオウルフ』に、サクソンは一度も登場しない。主人公ベーオウルフの時代の西暦５世紀前半には、サクソンは、その一部はブリテン島に移住し、また一部は大陸に留まり、今日の北ドイツのニーダーザクセンに居住していた。前述のように、プトレマイオスは、北海沿岸のエムス川の西がフリージアン、ヴェーザー川の西が小カウキー、エルベ川の西が大カウキーの居住地域と述べ、また、北海沿岸の西から東にかけてユトランド半島南端までの地域に、フリージアン、カウキー、サクソンが居住していると述べていた。カウキーは、前述のように、タキトゥスにもプトレマイオスにも言及された有力なゲルマン人部族であったが、その後サクソンと合体し、名称もサクソンとなる。それは、タキトゥスの時代とプトレマイオスの時代の間の２世紀の前半だったと思われる。その後、『フィンズブルフの戦』の５世紀の半ばまで、サクソンは、その地に定住し続けている。チェインバーズは、『フィンズブルフ

Hosei University Repository



の戦』のころ、フリージアンが、フランクとデネの間の北海沿岸地域のすべてを領土としていたと述べている(14)。しかしながら、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」には、フィンズブルフにおける戦の後、フィンズブルフに留まったヘンジェストが、冬の北海をデネまで船で戻るのは困難なので、戻ることを断念したという意味の記述がある(15)。つまり、ヘンジェストは、デネからフリージアンの居住地域へ船で来て、デネへ帰る時も船で帰ろうと考えていたのである。冬の海を避けて陸路をとれれば、デネに帰れる可能性があったであろうが、そのような選択肢がなかったのは、エムス川の東からエルベ川にかけての北海沿岸地域は、サクソンが居住していて、デネも、またフリージアンも、サクソンとの関係が必ずしも良好でなかったからであろう。つまり、フリージアンの居住地域は、２世紀のタキトゥスやプトレマイオスの頃と、さほど変わらない状況だったと思われるのである。

## 4.

ところで、クレーバー編纂の『ベーオウルフ』、第３版には、最初の方の頁に、The Geography of Beowulf という表題が付けられた地図が掲載され、『ベーオウルフ』で登場する古期英語のゲルマン人部族家の名称等が記されている(16)。その地図によれば、スカンジナヴィア半島には、北に SWEON スウェーオン（スウェーデン）、その南に GEATAS（GAUTAR）イェーアタスという名称が記され、そして、ユトランド半島の中部から少し北には、EOTAN エーオタン（ジュート）、スカンジナヴィア半島南端からバルト海の最も西側の島々、そしてユトランド半島東海岸にかけての地域に、DENE デネという名称が記載されている。また、北海沿岸地域の西側のゾイデル海の東西に二箇所 FRESAN フレーザン（フリージアン）という文字が、そしてその南のライン川両岸に FRANCAN フランカン（フランク）という文字が見出される。地図の中で一番大きな文字が DENE で、次が SWEON と GEATAS（GAUTAR）、そして、EOTAN、二箇所の FRESAN と FRANCAN が、さらに小さな活字で記載されている。クレーバーの地図は、クレーバー自身が、『ベーオウルフ』の本文の記述をもとに作成したものと考えられる。従って、そこには、クレーバーの

Hosei University Repository



考え方が、反映されていると思われる。その地図について、少し考えてみたい。

注目されるのは、ユトランド半島に、EOTAN エーオタン（ジュート）が記されていることである。『ベーオウルフ』の物語の展開の中で、エーオタンが登場するのは、すべて懐古的な挿話、あるいは『ベーオウルフ』の作者の回想的記述の中においてである。特に「フィン王の挿話」で重要な役割を持っているのがエーオタンである。主人公ベーオウルフの時代は、おそらく西暦６世紀の前半で、また「フィン王の挿話」の時期は、５世紀の半ば頃である。主人公ベーオウルフの時代には、エーオタンは登場しない。従って、地図のエーオタンに関係して来るのは、「フィン王の挿話」の、５世紀の半ばのエーオタンということになるであろう。

エーオタン（ジュート）は、タキトゥスとプトレマイオスの記述にもあるように、ユトランド半島に居住していた。そこにデネが侵入する。デネは、５世紀頃、その本拠であったスカンジナヴィア南端のスコーネ地方およびバルト海西端の島々から、ユトランド半島に入り、半島全体を支配するようになった。その時に、エーオタンは、デネの支配に対する対応で二つに分かれた。その一部は、デネの侵入の時に、フリージアンのもとに逃れ、フリージアンと連合した友邦国家のような存在になり、また一部は、デネの侵入の時に、デネの支配を受け入れ、その統治下に組み込まれることを選んだ。そうであれば、地図のエーオタンという名称は、何を意味するであろうか。

クレーバー自身は、その点に関連して、次のように述べている(16)。

> Is it possible that the Ags. version embodies two distinct strata of early legend reflecting different phases of the history of the Jutes? The settlement of the tribe in Jutland might have tended to link them to the Danes (hence Hengest's position); on the other hand, the sojourn of the Jutes in proximity to the Frisians was apt to suggest an especially close relation between these two tribes (hence Eotan = Frysan).

上の文章の冒頭で、クレーバーは、自らの見解を述べるのに疑問文を用いていて、積極的にその主張を展開しているわけではないように見える。しかしな

Hosei University Repository



がら、それはクレーバーの謙虚な姿勢の表れであり、クレーバー自身は、その主張に確信を抱いているように思われる。クレーバーの見解は、古期英語による『フィンズブルフの戦』（上記の the Ags. Version：筆者注）に関して言えば、ジュートの伝承に二つの歴史の層があって、最初は、デネの侵入の時に、ジュートがデネと連合したということであり（それゆえヘンジェストがデネとともに行動している）、一方で、ジュートがフリージアンの近くに逗留していたということは、別の段階における、ジュートとフリージアンの間の、親密な関係を十分に示唆するものであるということであろう。クレーバーの上の文章は、クレーバーが、二人のヘンジェストを同一人物とする見解、すなわち、フィンズブルフの戦における英雄のヘンジェストと、ブリテン島に渡って最初のイングランドの国家であるケント王国をつくったヘンジェストを同一人物とする見解に対して、異を唱える文脈で述べられた文章である。クレーバーは、二人のヘンジェストを同一人物とする見解に対して、「もしヘンジェストが（ブリテン島に渡った）ジュートであったならば、当然のことながら、私達は、ヘンジェストが、「フィン王の挿話」においては、フリージアンの側に立って戦ったものと考えるだろう。」と述べている。つまり、「フィン王の挿話」においては、ヘンジェストは、デネの側の代表としてフリージアンおよびフリージアンと連合したジュートとの戦いに参画したのであるから、ヘンジェストはジュートと戦ったことになる；ヘンジェストが（ブリテン島に渡った）ジュートであるのならば、フリージアン側にいたはずである；従って、デネの側にいる「フィン王の挿話」におけるヘンジェストは（ブリテン島に渡った）ジュートではない、という見解である。

筆者は以前、二人のヘンジェストが同一人物とであるとするトールキンの立場を支持してヘンジェストの出自について述べたことがある[17]。ただ、トールキンは、「フィン王の挿話」のジュートは、すべてデネの側のジュートとして書かれていると考え、それをヘンジェストがジュートである根拠としたが、筆者は、チェインバーズの言うように、「フィン王の挿話」では、ジュートは、すべてフレーザンの側のジュートとして書かれていると考えた。もっとも、チェインバーズは、ジュートは、すべてフレーザンの側のジュートとして書かれているゆえに、ヘンジェストはジュートではないとするのであるが、筆者は、

Hosei University Repository



ジュートは、すべてフレーザンの側のジュートとして書かれているゆえに、ヘンジェストがジュートであると考えたのである。

クレーバーによるジュートの歴史の二重の層についての説明は、クレーバーの述べるとおりであろうと思われる。また、トールキンも、おそらくクレーバーの見解をもとに、自説を展開したのであろう。ただ、クレーバーは、二つのジュートについて、歴史の二重の層とは述べているが、それをデネのユトランド侵入時における二つの異なった立場から生じたものであるとは述べなかった。デネに恭順の意を示した一派と、デネの支配に屈することを潔しとせずに、フリージアンのもとに移住した一派の、二つの異なった立場によって、二つの歴史伝承の層が生じたとは考えなかったようである。そうであるからこそ、クレーバーは、デネのもとにいたヘンジェストが、デネであってジュートではなく、フリージアンのもとにいるジュートと敵対したのであろうとしたのである。クレーバーにとっては、ジュートはあくまでフリージアンとともにいなければならないからである。しかしその場合、ジュートがなぜフリージアンのもとにいるのかという説明は難しくなるのではないだろうか。また、クレーバー自身が、第一の伝承の層で、ヘンジェストがデネと一緒にいることが、ジュートによって支配された結果であると述べているが、つまりその場合、クレーバーは、明らかに、ヘンジェストがジュートであると考えていると思われる。ヘンジェストがジュートであるのであれば、『フィンズブルフの戦』は、ジュート対ジュートの戦であるという可能性があり、また、デネの側にいたジュートのヘンジェストがブリテン島に渡ったヘンジェストの可能性も生じて来るのであるが、クレーバーは、トールキンのようには、その可能性を追求しなかった。おそらくその二つの歴史伝承を、デネの侵入によって生じた二つのジュートの伝承とは解しなかったからであろう。

クレーバーの第３版の地図に戻れば、ユトランド半島の EOTAN エーオタンという記載は、どのような意味を持つことになるであろうか。そのエーオタンが、ユトランドに独立したゲルマン人部族国家としてのエーオタンすなわちジュートであるのならば、その状況は、英雄ベーオウルフの活躍した６世紀前半よりも以前であり、さらに、５世紀半ばの『フィンズブルフの戦』および『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の時代よりも以前の状況となるであろ

Hosei University Repository



う。つまり、これからデネによってユトランドがデネによって支配される前夜の状況であるようにも見える。その後、ユトランドはデネによって支配され、ジュートの一部は、フリージアンのもとに逃れる。フリージアンの居住地域は、ユトランドから遥か遠方のライン川下流、ゾイデル海が北海と出会う地域である。地図には、そこに二つのFRESANフレーザンの名称が見出される。しかしながら、地図の上で、そのFRESANとユトランド半島のEOTANは、関係づけられていない。そうであれば、そのエーオタンは、独立したゲルマン人部族国家の時代であり、その地図は、英雄ベーオウルフの時代より百年以上前の状況を示していると考えざるを得ない。しかし、その地図で、フリージアンの近くにエーオタンが記載されていたとすれば、『フィンズブルフの戦』および『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」の時代の地図としては正しいとしても、『ベーオウルフ』の主人公ベーオウルフの時代としては正しくないことになるであろう。

それでは、クレーバーは、The Geography of Beowulfという表題の地図で、まさに表題どおりの英雄ベーオウルフの時代の地図を表したのであろうか。英雄ベーオウルフの時代、ユトランド半島のエーオタンは、すでにデネの支配下にあり、独立したゲルマン人部族国家でなない。その場合、地図のユトランド半島のエーオタンとは、支配された後のジュートを意味することになるであろう。しかし、その地図においては、ユトランド半島のエーオタンは、ゾイデル海の両側の二つのフレーザン、そしてその南のライン川沿岸のフランカンと同じような大きさの文字で記載されていて、あたかも、フレーザン、フランカンと同じく、独立したゲルマン人部族国家のように見える。それでは、その地図のエーオタンは、どの時代のエーオタンなのであろうか。

クレーバーは、ユトランド半島にEOTANエーオタンと記されている地図を、The Geography of Beowulfという名称で、自らの編纂した『ベーオウルフ』に記載した。前述のように、クレーバーは、歴史のある段階で、ユトランドのジュートがデネによって支配されたことは、十分にわかっていたはずである。従って、それを知ったうえで、あえて、ユトランドにエーオタンすなわちジュートというゲルマン人部族名称を記載し、そしてその地図に、The Geography of Beowulfという表題を付けたのである。クレーバーの意図はどのようなものだったのであろうか。

Hosei University Repository



結局、クレーバーは、その地図で、二つの時代を表し、それを「『ベーオウルフ』の地図」という名前で、統括したいと思ったのではないだろうか。クレーバーは、ジュートには、歴史の重層があると述べていた。ジュートの歴史の重層を、そしてその歴史の重層を生じさせたデネとの関係を、一枚の地図に表そうとしたのではなかろうか。「『ベーオウルフ』の地図」という名前の地図で、デネによってユトランドのジュートが支配される以前の時代と、そしてデネによってユトランドのジュートが支配された『ベーオウルフ』の時代を、一枚で表し、そこに「時間」を重層させたのであろうと思われる。フリージアンのもとにいるジュートは、そこに記されていない。しかしフリージアンのもとにいるジュートは、『ベーオウルフ』の詩人の回想の「フィンの挿話」の中の存在で、ベーオウルフの物語の中の実際の時間に存在しているわけではない。結局、フィンズブルフにおける戦を経て、北ヨーロッパの状況は、クレーバーの地図のようになる。問題は、エーオタンが、その地図に独立したゲルマン人部族国家として記載されているのか、あるいはデネに支配されているゲルマン人部族として記載されているかである。クレーバーは、あえて、そのどちらにもとれるような形でエーオタンという名前を記載したのではないかと思われる。デネに支配される以前とデネに支配された後と、二つのエーオタンを一枚の地図で表し、そこに時代の重層感を持たせたのであろう。その地図は、そのような深い意味を持っていると思われるのである。

## 5.

ところで、クレーバーの第３版の後、50年を経て、2008年に『ベーオウルフ』の優れた研究者達の編纂により、クレーバーによる第３版をもとに、*Klaeber's Beowulf* の表題で、第４版が刊行された[19]。Fulk と Bjork そして Niles の編纂による、その第４版にも、地図が掲載されている。地図は二枚で、E. F. Simcock によって制作された地図と記され、地図の表題は、Maps.―― North Sea Cultural Zone、Ⅰ. Scandinavia、Ⅱ. Britain で、Chief archaeological sites mentioned in the Introduction and Commentary という付記がある。

ここで触れたいのは、Ⅰの Scandinavia の地図である。それは、クレーバー

Hosei University Repository



の第３版と同じように、北ドイツ、ユトランド半島、デンマークの島々、そしてスカンジナヴィア半島南部の地図である。ただ、第３版では、The Geography of Beowulf というタイトルで、『ベーオウルフ』に登場する主なゲルマン人部族国家の名称が記載されていたのに対し、第４版では、記載されているのは、現在の地名である。デンマークと北ドイツ、オランダに関しては、英語の地名が記され、スウェーデンの地名は、スウェーデン語になっている。一方、地図に、北ドイツ、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーの様々な場所に、１から16までの数字が書かれ、地図の左側に、その１から16までの場所の地名が、それぞれデンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語で書かれている。付記にもあるように、それらの場所は、『ベーオウルフ』と関連した考古学の発掘資料が出土した場所になっている。

第３版と第４版の地図は、それぞれ異なった意味を持っているのであるが、しかしながら、疑問に思われるのは、なぜ第３版の地図が、第４版では削られたのであろうか、という点である。第４版の編纂の時に、読者に、第３版以降の考古学上の資料が出土した場所を示すことが重要と考えられたのであろうが、それは、第３版の地図を削る理由にはならない。第３版の地図は、まったく別の意味を持っていたからである。筆者が推測するに、第４版の編纂者達は、第３版の地図を不正確な地図と考えたのではないであろうか。筆者も一時期、第３版の地図が誤った地図とは言わないまでも、不正確な地図ではないかと思っていたことがあった。前に触れたジュートの記載に関してである。第３版の地図では、ユトランド半島の南端から、バルト海西端の島々、そしてスカンジナヴィア半島南端の地域にかけて、地図の中で最も大きな文字で DENE と記されている。ユトランド半島もスカンジナヴィア半島も、それぞれ半島東端の一部、半島南端の一部に、語頭のＤと末尾のＥがかかるように記載されていた。そしてユトランド半島中部から北部にかけて、EOTAN、ゾイデル海の両側に二つの FRESAN、その南のライン川、モーゼル川の流域に FRANCAN という文字が、それぞれ DENE の半分ほどの大きさの文字で記載されていた。その地図で見る限り、ユトランド半島の EOTAN は、DENE に支配されているのかいないのか、わからない。第４版の編纂者達は、その地図の表題の The Geography of Beowulf から判断して、その地図の中で、EOTAN が DENE に支

Hosei University Repository



配されていないようにも見えるので、それが主人公ベーオウルフの時代を必ずしも反映した地図ではないと考えて、削除したのではないかと考えられるのである。編纂者達がどのような意図で、第３版の地図を削除したか、第４版には触れられていないので、推測する他はないが、少なくとも第３版の地図に誤りがあるわけではなく、むしろそこに、歴史の重層的な意味が含まれている可能性があることを指摘しておきたい。

## ６.

以上、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」から窺うことができるフリージアンとジュートの居住地域について、クレーバーの第３版の見解を中心に考えて来た。フリージアンについては、タキトゥスやプトレマイオスの記述と古期英語の『ウィードシース』の記述をもとに考えれば、西暦２世紀から、英雄ベーオウルフの時代の６世紀前半まで、ほとんど変化はなかったものと考えられる。一方、ジュートに関しては、タキトゥスやプトレマイオスの時代には、ユトランド半島に居住していたと思われるが、『ウィードシース』の頃には、フリージアンの近隣に居住していた。それは、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」の状況と重なっていた。ジュートは、デネの侵入まではユトランド半島にいたのであるが、デネの侵入の時に、デネに帰順する一派と、デネの支配を拒絶する一派に分かれた。後者はユトランド半島を離れて、フリージアンの近隣に移動し、フリージアンの友邦国家として、そこに定住したのである。その二つに分かれたジュートが、フィンズブルフで出会うことになり、それが発端となり、フィンズブルフにおける戦が生じた。それが『フィンズブルフの戦』に描かれた戦であり、その戦のあとのフィンズブルフにおける第二次の戦について述べられたのが、『ベーオウルフ』の「フィン王の挿話」であった。

本稿では、『ベーオウルフ』の編纂において計り知れない功績をあげたクレーバーの見解について、第３版で言及された見解をもとに論じた。クレーバーは、古期英語の『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」で、ジュートの二つの伝承の層が表れているとした。確かに、歴史的にジュートは、デネの侵入の後、デネ

Hosei University Repository



の統治に甘んじ、ユトランド半島に居続けることを選んだ一派と、デネの支配を逃れ、フリージアンの近隣に移住し、フリージアンと連合国家を作った一派がいた。しかしながら、クレーバーは、その二つのグループを、デネの侵入を契機として別れた二つのジュートとは捉えなかったようである。そのジュートについての認識が、クレーバーの第３版の地図に反映されている。その第３版の地図には、エーオタンすなわちジュートが、ユトランド半島の独立した部族国家のジュートであるのか、デネに支配された状況のジュートであるのか、わからないような形で記されていている。おそらくクレーバーは、あえてそのような記載の仕方をして、ジュートの歴史についての重層感を出そうとしたのであろうと思われる。つまり、そのことにより、ユトランドへのデネの侵入という出来事が、地図上に記されることになるのである。おそらく、クレーバーの認識では、ユトランドのジュートは、主人公ベーオウルフの時代には、すでにデネに支配された存在であるのであるが、『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」において、ジュートは極めて重要な役割を持っているので、The Geography of Beowulf と名付けた地図の中で、フレーザンやフランカンと同じくらいの重要性を付与したかったのであろう。ジュートについてのクレーバーの歴史認識のすべてが、必ずしも正しかったとは言えないが、結果的にその地図は、エーオタンすなわちジュートの歴史的重要性と、その歴史の重層性が見事に凝縮された地図となったのである。

なお、クレーバーの第３版をもとに三人の編纂者によって刊行された『ベーオウルフ』の第４版には、クレーバーのジュートについての見解に、さらに新しく加えられた注解が見出される。その第４版の注解については稿を改めて論じたいと思う。

［注］

(1) 拙稿「『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest とジュート」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第９号、2012年、を参照。

(2) *Beowulf and the Fight at Finnsburg,* ed. Fr. Klaeber, 3rd ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950.

Hosei University Repository



(3) タキトゥス、『ゲルマーニア』、40。Tacitus (Publius Cornelius Tacitus), *Germania. Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938；邦訳：タキトゥス著、泉井久之助訳、(改訳)『ゲルマーニア』、岩波書店、1979年。タキトゥス、『ゲルマーニア』、40。

(4) *ibid.*, 34.

(5) PtolemaiusⅩⅠ, 7：Klaudios Ptolemaios, *Claudii Ptolemaei Geographia* ed. Karl M üller and C. T. Fischer, 2 parts., Paris, 1883-1901. 織田武雄監修、中務哲郎訳、『プトレマイオス地理学』、東海大学出版会、1986年。なお、ゲルマン人の名称は、タキトゥスにおける名称との関連でラテン語表記にした。

(6) *ibid.*

(7) 拙稿「サクソンとザクセン――中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景(3)」、『法政大学キャリアデザイン学部紀要』、第3号、2006年、を参照。

(8) Krapp, J. P. and Dobbie, E. v. K., ed., *Widsith: The Exeter Book*, Columbia University Press, 1936, p.150, ll.24-27.

(9) 後述するように、クレーバーの第3版の後、*Klaeber's Beowulf* というタイトルで、三人の編纂者による第4版が刊行された。それには、第3版以降の考古学的な成果についての言及が見出され、フィンズブルフに関するものも記されている。それについては、稿を改めて触れることにしたい。

(10) J. R. R. トールキンは、ジュートがデネによってユトランド半島を追われたと述べているが、A. ブリスは、ジュートがデネではなく、アングルによって追われたとしている Cf. Tolkien, J. R. R., *Finn and Hengest,* ed. A. Bliss, *HarperCollinsPublishers*, London, 2006, pp.172-180。筆者は、A. ブリスの主張を検証し、トールキンの見解が事実に近いことを明らかにしようと試みた。拙稿、「『フィンズブルフの戦』と『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について―― A. Bliss の説を中心に」、『英語文化研究』、成美堂、2013年、14-28頁。

(11) Klaeber ed., *op. cit.*. p.233.

(12) *ibid.*, p.233, fn 3.

(13) *ibid.*, Proper Names, Fin(n), p.434.

Hosei University Repository



(14) Chambers, R. W., *Beowulf —— an Introduction to the Study of the Poem*, edited and supplemented by C. L. Wrenn, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959, p. 289.

(15) *Beowulf*, ll.1127-1136.

(16) Klaeber ed., *op. cit.*, Introduction の前の頁。

(17) *ibid.*, p.235, fn 5.

(18) 拙稿「『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について」、『異文化の諸相』第31号、日本英語文化学会、2011年；『ベーオウルフ』「フィン王の挿話」における Hengest について(2)—— R. W. Chambers と J. R. R. Tolkien の説を中心に」、『異文化の諸相』第31号、日本英語文化学会、2013年）を参照。

(19) *Klaeber's Beowulf*, ed. R. D. Fulk, R. E. Bjork, J. D. Niles, 4th ed., University of Toronto Press, 2008.

Hosei University Repository



# ABSTRACT

## On the Territories of the Frisians and the Jutes in *the Fight at Finnsburh* and *the Finn Episode in Beowulf*, with Particular Reference to the View of Fr. Klaeber

Michio IWAYA

The Jutes and the Frisians were the old Germanic tribes who had been described in the works of the Roman historians. We can also find those two Germanic tribes in *the Finn Episode* in *Beowulf,* the largest epic in old English and in *the Fight at Finnsburh*, one of the oldest poems written in English. The story in those old English works is about the battle between the Frisians and the Danes, and the Jutes had an important role in it. At first the Jutes had inhabited Jutland, which means the land of the Jutes. But later, in the old English poems mentioned above, they lived in the vicinity of the Frisians. Why they can be found there is a difficult problem which has been argued by many scholars. Fr. Klaeber is one of the most eminent researchers of *Beowulf* in the 20th century and his third edition of *Beowulf* is thought to be the most excellent one which has ever been published. He also argues on the Jutish problem and presents some important comments about it. This paper first aims at searching for the territories of the Jutes and the Frisians in the works of the Roman historians and the old English poems. And it also investigates the view of Fr. Klaeber through his comments and map in his third edition. It finally attempts to pursue the true history of the Jutes suggested in the battle between the Frisians and the Danes.